

第10回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

七夜の温もり

家森 澄子・岡山県倉敷市

祖父は八十路を目前にして持病のリウマチが悪化し床についた。

私たち姉弟にとつて、親代わりの祖父だ、どうにかもう一度元気になって欲しい、終戦当時のあの頃のこと、思い出される。

父は昭和二十年一月に出征し四月に戦死した。十一歳の姉を頭に七歳の私、三歳の弟、生後三ヶ月の妹を抱えた母を祖父母が支えてくれた。

祖父は勤め帰りには必ず我が家に寄つて、食糧難のあの頃に祖父の自転車の荷台に付けた、竹かごは私たち姉弟にとつて食べ物魔法の宝庫に思えた。

夕方 ギイ、ギイと自転車の音がすると、姉弟三人が外へ飛び出し、早くかごの中が見たくて飛び跳ねて落ち着かない。そんな私たちに怖い顔をして、

「行儀良くしなさい、何か言うことを忘れてないかなあ」  
「おじいちゃん、お帰りなさい」

口早に言つて、かごの中を覗く、サツマイモであつたり、トウモロコシであつたり、乾パンや時には副食の魚や鶏肉もあつた。

それから六年後、日頃の無理が祟つて母が病死した。その翌年祖母が亡くなった。それからは、祖父はひとりで私たちを成人するまで育ててくれた。

祖父に何かしてあげたい、食べ物は何でも食べられる、私たちの育ち盛りの頃から思えば、何でも手に入る、世の中になつていた。祖父に好物を持参すれば喜んで食べてくれた。

ときには祖父から教わつた蕎麦を作つていくと、いろいろな評価が聞ける。  
「も少しそば粉を固く練つた方が良い」

とか、ゆで時間が長すぎるとか、厳しい批評だが後々とてもよい勉強になった。そのうち食欲もなくなり、目に見えて体力も落ちてきた。大好物の鯛の刺身を届けると

「これは美味しいこんにやくじゃあー」と、言う。

あれほど好きだった鯛の味も分からなくなつたのか、笑うに笑えず涙が先に出る。祖父が病床についてから二度目の冬を迎えた。日々身体の動きにも、言葉にも生気がなくなつていく祖父、寝返りを打つたびに、

「寒い」

手を動かしては「寒い」これを聴き、同居している義叔母は布団を一枚増やす、すると「重たい」と漏らす無理もない。木綿の布団を一枚増やせば衰弱した身には応えるだろう。

「おじいさん、何処が寒いの」

「首や肩や、腰が寒い」

身体にそぐわないから温かくないんだ、軽くて暖かい毛布を買ってあげようと、毛布を購入してきた。

ところが病で手足が自由に動かせない祖父は寝返りするたびに背中が出て自分でも自分で掛けることが出来ない。私と姉は色々考えた末に上から掛けるものでなく、着ているように身体に、馴染むものがいい、それは「かい巻」でも、私の知っているかい巻きは、綿入れだ。あれは着ては寝られない、温かくて軽くて肌にそぐう素材がいい。「毛布のかい巻き」有るだろうか。今まで見たことが無い、作れるものなら毛布で作ってあげてもいい。即寝具屋に問いあわせた。

「店には置いて無いですが、毛布の本場で聞いてみてあげます」

「軽くて温かいのをお願いします」

四、五日して連絡があった。色は三色有ったが軽くて暖かそうな素材を選んだ。早速祖父の肩に掛けると、

「こりゃあ温い、まるで懐炉をおおてるみたいじゃ、こりゃ何というもんなら」

「これは、毛布のかい巻きと言うの」

肩も、首も腰も手先まで温いと、大満足してくれた。

見舞いに来てくれる人ごとに、

「これは温いものじゃ、孫が買ってくれた」

と、話していたが、だんだんと口数が少なくなり、食欲も落ちた。そのうち声をかける  
と、「温い」の言葉しか返ってこなくなった。

「おじいさん、ご飯ですよ」

「おじいさん、薬の時間です」

「温い」

と、その言葉しか出せなくなった祖父が愛おしく、「温い」の言葉を聞きたびになぜ、もつと早く気づいてあげなかったかと深い後悔に涙した。

毛布のかい巻きを着せてあげてから一週間目の夜、容態が悪くなり親戚が集まった。

大きな息を肩でしている祖父は、息を吸い込んで、体を震わせながら、か細く途切れ途切れにはく最後の息の中から、

「ヌークーイー」

こう聞き取り、みんな涙の顔を見合わせた私は辺り構わず祖父の胸元に顔を埋めた。

祖父はかい巻きの襟を大切そうに両手で握り、安らかな顔で旅立った。